



東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼 兒 の 教 育

主 幹
倉 橋 惣 三

七 月 號

理學博士 山口 銳之助 先生
文學博士 藤岡 勝二 先生

監修 敎文書院編輯部編纂



現代學生知識の泉源!!
豫習復習受験の要書!!

近時諸種の學生參考書が續々と出版されるが、不備不正確なものも多く、學生諸君をして其選擇に迷はしめるは吾人の最も遺憾とする所である。吾がカーレント參考書は特に是等の點に着眼して前條のモットーに基き、理學博士山口銳之助、文學博士藤岡勝二兩先生監修の下に、各々専門家を分擔し銳意完成したる模範的良參考書にして、豫習、復習、受験に必要缺くべからざるものである。

學生の良師となれ
簡にして要を盡せ
確實にして權威あれ
豫習に興味あらしめよ

これが本書編纂の
モットーである。

西	日	代	幾	化	物	外	日
洋	本	本	何	學	理	國	本
史	史	數	學	學	學	地	地
上下二册	上下二册	上下二册	上下二册	上下二册	上下二册	上下二册	上下二册
衛生	鑛物	植物	動物	地理	英國	東洋	算術
衛生學	鑛物學	植物學	動物學	地理學	英國文法	東洋史	算術史
——	——	——	——	——	——	——	——
册	册	册	册	册	册	册	册

最新正送
ボイ各價料
新各冊各
ボ各冊各
ケ活金各
ツ字卅各
ト採五四
型用錢錢

發行所

東京上野寬永寺坂下
(上根岸八十八)

敎文書院

(振替東京四六壹壹番
電話下谷三〇四七番)



育教の兒幼輯編會協園稚幼本日

會長

東京女子高等師範學校校長

茨木清次郎

主幹

東京女子高等師範學校教授

倉橋惣三

贊助員 (五十音順)

帝國教育博物館長

棚橋源太郎

東京女子高師教授

巖谷季雄

東洋大學教授

田子一氏

東京帝大醫科講師

乙竹岩雄

東京女子師範學校長

高島平三郎

東京高師教授

文博 太田孝之

東京女子高師囑托

龍山義亮

慶應大學教授

醫博 唐澤光德

帝國教育會理事

野口援太郎

東洋幼稚園長

醫博 岸邊福雄

文部省社會教育課長

乘杉嘉壽

早蕨幼稚園長

久留島武彦

京都帝大教授

野上俊夫

帝國教育會會長

文博 澤柳政太郎

東京女子高師教授

坂内みつ

東京市學務課長兼視學長

文博 佐々木吉三郎

東京女子高師教授

醫博 弘田七藏

東京高師附屬小學校主事

文博 佐々木秀一

東京女子高師教授

文博 堀七藏

東京女子高師教授

文博 下田次郎

東京帝大教授

文博 松村武雄

東京女子高師教授

醫學士 菅原教造

東京帝大教授

文博 松本亦太郎

東京女子高師附屬高女主事

醫學士 富士川游

奈良女子高師校長

醫學士 榎山榮次

東京女子高師講師

藤井利譽

奈良女高師附屬幼稚園主事

醫學士 三田啓

東京女子高師講師

藤五代策

東京高等學校長

森川正雄

大阪市教部育長

文博 福士末之助

東京帝大教授

湯原元一

文博 谷本富

東京帝大教授

文博 吉田熊次





次 目

長編 小説	如何なる玩具を選ぶべきか	夏	幼稚園細目	自發活動と目的活動
春	山内俊次	東京女子高等師範學校教諭	馬場定一	東京女子高等師範學校教授
岡田美津	一二三	堀七藏	一〇九	倉橋惣三
一二七		一二〇		一〇二



理學博士 山口 銳之助 先生 著
 川副 佳一郎 先生 著

ローマ字第二讀本

社會の進歩と共にローマ字の必要は、日に月に加はり、子供達のローマ字を求め熱望も漸次高まつて行くやうに思はれます。日本將來の爲め、此の際第二の國民たるべき一般少年少女達に、ローマ字の知識を與へることは極めて大切であることと存じます。本書は最も完備した初學用ローマ字讀本として兩先生の苦心編纂に成れるもの、

ローマ字習字帖	ローマ字第一讀本	ローマ字第二讀本	ローマ字第一讀本
價金二十錢	價金二十五錢	價金二十五錢	價金二十五錢

東京上野公園寛永寺坂下
 (上根岸八十八)
 發行所 敎文書院
 振替東京四六一一一番
 電話下谷三〇四七番

東京女子高等師範學校內

日本幼稚園協會

幼 兒 の 教 育

主 幹

倉 橋 惣 三



第 四 號 1924 第 二 十 四 卷

自發活動と目的活動 (三)

——保育原理の問題——

倉 橋 惣 三

今まで述べて来たところを、念の爲にもう一度繰返して云ひますと、自發活動と云ふ問題は生活の形式としての言葉としては生活の出發點に關する問題である。生活の出發點と云ふことをよく見ると云ふことは、そこから自然の大きな法則に従つて教育をして行かうと云ふ大きな教育心の湧いて來る一つの力でありまして、其意味に於ては、自然の大きな力と云ふやうなことを少しも認めて居なかつた古い教育の考に對して非常に新しい刺激を與へるものです。又我々として其自發的活動を認めて、それをどう生かして行かうかと云ふ所に非常な努力が要る譯でありませう。しかも、それは生活の出發點に關する問題であつて、生活と云ふものは出發點と到着點と、此間の過程と此三つから成立つて居るのでありますから、到達及び過程、此問題も是非考へなくてはならぬ。ところで、自發活動と云ふものは出發點の問題であると云ひますが、併し人間の生活に於ける出發點と云ふものは、只機械的に色々のものが、ほつ／＼と湧いて來ると云ふやうなものとは少し違ひまして、或る意味に於ては結果と云ふものを抱含したるものであると見なければなりません。例へばここに蝶々が居りまして、其蝶から蝶々を追駈けて行くと云ふ一つの自發活動が引出される。其自發と云ふことは生活活動の出發點に關するものではありませんが、其子供としては只蝶々を追駈けるのが、生活ではなくして、それを取ると云ふことが、其場合に子供に於て考へられて居ることでありませう。或は考へると云ふ言葉が悪ければ、自ら其自發活動の中に

含まれて居るものであります。餘程特別な發作的な子供でありましたならば、只自然界に向つて機械的に出發するだけで終る場合もあるかも知れませぬが、併し普通の子供でありましたならば、其活動が齎す所の或る到達點、即ち結果と云ふものは含まれて居るのである。寧ろ其結果を十分認めて其結果を自發的に捉へやうとして居るのであります。つまり、出發點及び到達點と云ふことは抽象的に精神活動を分解した二つの點でありますけれども出發點と云ふことは、到達點と云ふものがあることに依つてのみ考へられるものだと云へるのであります。總ての自發活動が發作でありましたならば、其子供が何等の到達の結果を其心の中に含まない處の純發作であつたならば、それだけでは一つの精神活動の出發點と云ふことも出来ない。單純な機械に過ぎないのであります。併し苟くも多少の精神生活の體を具へて居る程の年齢の子供でありましたならば、其蝶々を捉へると云ふこと、そのことを心で自發して仕舞つて居る、さうまあ見て宜からうと思ふのであります。

然らば目的活動と云ふ言葉と自發活動と區別して云つて居るが、何處を本當に區別して居るのであるかと云ふに、若し自發活動と云ふものが出發點であつて、結果目的と云ふものは到達點であると云ふ此分け方からだけ見れば、只今説明した所に依つて、其自發活動内に目的と云ふものが含まれて居る。既に其自發活動に目的が含まれて居るのであつたならば、所謂活動と云ふものと其目的を含んで居る所の自發活動は何處が違ふか斯う云ふ問題が起つて來ると思ひます。之に付てデウエーの申して居ります言葉の中に之を説明するに都合の宜い言葉があると思ひますが、デウエーは思考の心理を考へて、思考と云ふことは抑止されたる結論であると云つて居る。此意味は、人間の殊に子供などの生活に於ては、總て結果、言換へれば一種のコンクリーションと云ふものに直ぐ飛んで行く、蝶々が居ります取りたいと思ふと直ぐ取れると思ふ。取りたいと云ふこと、取れると云ふことを直に食付けて仕舞ふ。抑止せられざる結論を子供の心の中に畫いて居る。またあの樂天的の人々は——思ふこと盡くなると思つて、さうして計畫ばかりして、色々のことを考へては思付いては止

めで居る人々は、君のやうにさう考へた所で、一々なるものぢやないと云つて笑はれますが、其人はどこが笑はれるに値するかと云へば思付くと云ふことゝ行かれたると云ふこと、出發することゝ到着することゝの間に何らの距離を置かないところが笑はれるのです。出發する、即ち到達するといふ風に、一切抑止の條件を入れて居ない人が思慮の淺い人であると言はれて居りますが、實は思慮の短い人といふていいのでせう。

考へると云ふことゝ、或る目的を解かうと思ふことゝは同じ様な手つきです。目的は到達點は向ふにあり、それを解かうとする心の出發點は此方にありますが、思考の生活に於てはどうであるか、可なり距離のあるものであると云ふことは慎重に知つて居る。斯うだから斯うだと一人定めしないで、早定めしないで、此間に此處から此處に行く間にさう一と飛びには行けないと云ふ抑止活動が此處に行はれるのであります。是は思考と云ふことを抽象的に考へた場合であります。が、具體的に或る目的に到達すると云ふ其生活に於きましても同様である。自發活動と云ふものは目的のない生活ではないのでありますけれども、目的と自分の自發との間の道程と云ふものに付て、何らの注意を拂つて居ない生活であると云ふことが出来ると思ふ。お月様を取つて呉れろと云ふ子供は、我々が普通解釋する所に依りますれば月に到達する距離が遠いからと云ふ實際上の距離と云ふ話にして解しますが、其子供に於ては月を取らうと思へば其月は直ぐに自分の手に来るものだ、到達するものだ、思へば向ふから飛んで来る位に思ふ。斯う云ふ風な心の状態に居るのです。我々でありますと云ふと、此問題を解きたい、彼處に行きたいと思ひましても、それには道があつて、其道は出鱈目に飛んで行つては他の方に行つて仕舞ふと云ふ考慮もある、其考慮が我々の活動を抑止する。其抑止得ただけでありましたならば、應じて驚かず臨んで動かず、只静止状態に居るのであります。が、眞實な自己活動と云ふものは此抑止得たる結論で、即ち出發點と到達點との間へ適切なる道程を入れて来る、適切なる過程を入れて来る、心理的には記憶を持出すこともありませう、經驗からあるものを得て來ることもありませう、兎に角色々の道を行つて、此道を蹈んで行くと云ふことをして、此方か

らも行かないで此方からも行かないで、此處に到達する、斯う云ふ順序を辿つて行くのが、即ち思考であります。

此デューエーの云つて居る目的活動と云ふものは、詰り目的を持つて居る活動と云ふ言葉でありますけれども、自發活動と雖も實は目的に向つての自發活動であるのだとすれば、普通云ふ所の目的活動は寧ろ過程を考慮したる活動である、斯う云つた方が適切であります。我々お互に、ものごと直ちに成るものがないと云ふことは知つて居る。人間でありまして、何か非常に希ふ所の目的を非常に強く持ちますと云ふと、心が惑つて仕舞つて、熱心なるが故に其手續を誤り、抑止しないと云ふやうなことがあるのであります。其道をちやんと辿つて行く時に所謂目的活動と云ふ言葉が現はす所が現れて来る。そんなら何故道程或は過程活動と云はずして目的活動と云ふかと云ふことが言葉使ひの問題ではあります。其處に起る、此自發活動であつても目的と云ふものが含まれて居るのだと云ふことを今申しましたが、併し更に進んで考へれば、此抑止せられたる或る距離或は間隔、實際上の場合としては、或る種の困難、實現の困難、斯くの如きものを此處に挟まない目的と云ふものは本當の出發點から差別せられたる目的と云ふものゝ性質を帯びないことになるのであります。言換れば其過程を考へた時だけ目的と云ふものが心理的に判然したのものになつて来る事實はありますのであります。

或る人又考へて云ひますのに、我々が目的を意識する心理状態は其目的の大切さを知ればそれで宜いのである、大切なことを知れば宜いのである。詰らない目的は意識しやしないが、大きな目的は意識するものだと言ひます。併し、其大切と云ふことは其中になかく、容易に實現出来ないと云ふ困難性を含めて居る場合の方が多いのであります。我々が一步踏んで行ける所は何も此處を目的だと思ひませぬ、私が歩いて居る時に私の右の足が到達する其三尺の先きを目的として歩いて居るかと言へばさうてはない。是は樂々行けるからそんなに目的だと思ひませぬけれども、山を越えて、坂を越えて、障害を越えて辛うじて到達出来べきものは、私にとつて目的としての意識が判然して来る。詰り目的と云ふこと

は此中に含まれる時に簡單なことでありますけれども、意識の上に判然して来る爲には過程を含んで居る。逆にならば過程を特に考へた時に目的が判然して来ると云ふことは、目的が判然して居る時だけ我々は過程を尊重した生活をして居ると云ふことになりませう。出發點だけがあつて、何處へ行つても宜いやうな、飛んでつても宜いやうな、詰りどうなつても宜いやうな生活であつたならば、過程も考へて居ないが、それだけ目的も判然して居ない、此道を斯うく、斯うく、辿つて行かなくちやならぬと考へて居る時だけ我々は其目的と云ふものが、他のAでもなく、Bでもなく、Cであると云ふことがそこに判然意識されて来る、斯う云ふことが出来ると思ひます。

此意味に於て目的活動と云ふものは自發活動と別なものでなくして、自發活動と云ふものが、意識上に判然して、自發活動の中に含んで居つた目的と云ふものが分解されて判然した獨立の意識に上つて来る。さう云ふ風に云へると思ふのであります。之を縮めて申しますならば、目的活動の一番狙つて居る所は、其活動に目的があるかないかの問題ではなく、過程をしつかり考へて居るかどうか、早呑込しないで、うかくして居ても出来ると思はないで、出鱈目でも到達すると思はないで、過程に向つて慎重に考慮を拂つて居る生活と云ふことになりませう。近來の目的活動と云ふことを主にして色々行はれて居ります教育學說教育方法は盡く生活過程の訓練を主にして居る。抑止せられたる生活過程に向つて適切な材料と適切な順序を持つて来ると云ふことは即ち生活の組織立つと云ふことであります。自發活動を主としたる生活は自發活動と云ふ所に値打を置いて云ふならば、其生活が組織立つて居るや否やと云ふ問題は這入つて来ないのであります。どれだけの生活動力を居るか、と云ふ問題が主になつて来る。過程を入れて来た時に其生活がどれだけ動力を持つて居るか、と云ふ問題を離れて組織立つて居ると云ふことの方の問題になつて来るのであります。昔の只子供を外から導外く、から引立て、教育すると云ふことをして居りました時代に、第一に氣が付いたものは皆子供は自分で生活を出發するものであると云ふ問題で、それが大いに教育上に貢獻しました。其問題が更に進歩いたしますと云ふと、其出發動力と云ふも

のを勿論尊重しながら、而も生活の組織立つと云ふことを主にして来る。組織立つと云ふことが主ならば、外から子供に組織立つた生活を與へて宜いのであります。組織立つと云ふことだけが、必要な條件ならば、手を引張つて行つても生活が出来るのであります。既に自發と云ふ問題が此處にある以上は、動力がある組織立つた生活と云ふ問題を考へなくちやならぬ、動力のある組織だつた生活と云ふものが是が詰り兒童に對する動機と云ふことの由つて區別される所以であります。

尙ほ、教育の實際と云ふ立場から考へて見ますと云ふと、我が國では、未だ本當に此生活の出發としての生活動力、即ち自發活動を存分に發揮させてやると云ふことに就いて決して十分のことが我々出來て居るとは云へないと思ふ。此點に未だ無限の問題が残されて居ると思ひます。併しながらもう一つの問題は、假に其自發動力が發揮せしめ得たものとして、一方の組織の方をどうしてやらうかと云ふ問題に於て、益々之が我々に於て十分に行つて居ない。所で、理論上は今述べた通り二つが一緒になりますが、實際上は動力の方を主にして説いて行きますと云ふと、組織などを構はず、言換れば過程などを構はず、直ぐに此處に飛んで行きたいと思ふ、飛んで行けると云ふことばかりになりまして、自ら此方に逼し易い。組織立つと云ふ過程に對する考慮の方を餘り主にいたしますと、抑止作用が働過ぎまして、生活の自發動力と云ふものが減ずる。今日我々の惱んで居る問題は自發活動を尊重しようかと云ふ問題でもなく、有目的活動を尊重しやうかと云ふ問題でもなく、下手をするとプラス、マイナスの關係の性質を持つて居る此二つをどう實際調和して行かうかと云ふ問題が今の問題だと思ひます。

幼稚園に於きましても、小學校に於きましても、若し自發活動と云ふ原理だけに依つて自分の教育を導いて行かうと云ふ人は、所謂新らしい自由主義などいふ中にある。同時に又目的活動と云ふ言葉に促されまして、生活過程の組織立つと云ふことだけに注意を拂つて、生活動力を少しも考慮しないで、只組織だつたと云ふ生活だけに歸へる人があつたならば

是は古い頑固主義の中にある。しかも、此二つをどう調和して行かうかと云ふことの問題が、ほんとうに今日の問題なのです。殊に今日の新しい傾向は、どちらかと云へば目的活動を主にして居ります、自發活動を忘れて居るのぢやないのであります。目的活動の方を主にして考へる必要がある。是には原因がありませう。自發活動と云ふものが出發點だけ考へて、稍々發作性を持つやうな趣があつたのに鑑みて目的活動の方に非常に向つて居るのもありませう。言換れば其自發活動の詩的な所に慄らなくて、現實生活の組織と云ふことに重きを置いて、其方に大いに注意を拂つて乗出したのでありませう。亞米利加に於て幼稚園小學校の教育にプロジェクトメツツドが頻りに用ひられて居る、其實際は詰り此方の非常に考慮を拂つて居るのであります。自動といふ概念ばかり主にしてしないで、動機と云ふ方に段々道入つて居るのだと云ふのであります。しかしまた實際の教育に於ては、自ら一方に偏するが爲に生活を組織立てやうとすると組織立つ方ばかり偏しても來る。子供に繪を畫かす。繪が畫きたくなつたから繪を畫くと云ふ其自發活動を主にして居つたのでは、今日足りなくなつて來まして、何の爲に繪を畫く、畫んとするの意思を子供の心の中に起さしめようとする。即ち動機を起さしめようとする。そこで繪を畫いてクリスマス額を作る。其額を作ると云ふことはクリスマスと云ふ大プロジェクトの中の小プロジェクトになりまして、其クリスマスの額を作る爲に繪を畫くといふことにするのです。即ち其時に繪を畫くのは畫きたいからどんな繪でも畫くと云ふのぢやなくて、クリスマスの裝飾の繪を畫く、其畫くと云ふことに於ては目的が判然して居るのでありますから、それに適切な繪を畫かなくちやならぬと云ふことで組織立つて來るとするのです。

所が又若し餘り其目的結果の方を主にして子供を導き過ぎますと、子供は繪を畫きながら、畫いて居る現在の生活に對しての動力が減りまして、是は何になるのだと云ふことばかりを注意するやうになる。つまり自發活動と目的活動を二つ並べて始終よく考察して行かなければならぬといふのが、今日の吾々教育者の新しい苦心なのです。(終)

幼稚園細目 (續き)

馬場 定 一

四、最初の週に於ける自由遊

子供が始めて幼稚園に來た日、それは、新しい、不思議な環境に投げ出された日、そこでは、未だ曾て見たことも無い澤山な小さい人々と密接する處に來た時、其の新しい、時としては六かしい経験が、子供等の親しい家庭の生活からあまりにかけ離れた感じを與へない様に、子供をして之に應じさせる事は大に大切な事である。この最初の週間を自由遊の時間として、是から自然的に且つ漸次に規則正しい課業が開かれる様にする事は一部の保姆の習慣となつて居る所であつて、この週間が次第に發達して來れば遂には普通一般のものとなるわけである。この小さい外來者に、始めから會集に參列させたり、恩物を課したりなどし

て、之に凝りかたまらせる様な事をしないで、保姆は最初の數日間を、子供と知り合になる事や、子供に新しい環境や、子供相互に慣れしめる様にしむけて行く方がいい。例へば、ボール、極簡單な積木、糸に貫す珠數玉、其の外二三の簡單の玩具や澤山の繪などを、子供の申出に應じて、近づき易い場合に配置よくならべてやりなどする。又この間に、子供等の中の或る者に、植物に水をやる事、金魚に餌をやる事砂場の手入などの様な幼稚園に於ける色々の義務の指導を始める。適当な時機が來れば保姆はピアノの所へ行つてメロディーを弾いて、子供等が其の周圍に集つて來た時に何か簡單な歌を唱つてやる。若し米國生れの子供ならマザーグースなどが出發點として勝れたものである。それはその言葉が既に子供等に親しまれて居るから。而し

て、尙又程度言葉に相應して居るメロディーは子供に自然的に且つ容易くわかつて、殆んど未だそれを知らないのに其の歌に合はして行くのである。こんな風にして、拶挨の歌や、又時と場合とに由つてはその必要に應じて極簡單な歌に導いて行く事が出来る。何かボールゲームをする爲に子供が圓形に集る時にはランニングやスキッピング等の如き運動遊戯の初歩にも自然的に導かれる。其の内には訖度お嘶をするに都合の好い機が熟して来る。子供がお嘶を聞きに集つて来る様になれば、もう保母は、單に幼稚園としての課業が一つ進んで来たといふ丈では無く、自分を子供に結び付ける紐を一層強く編んで居るといふ事になるわけである。かうした方法には何等押付がましい所はなく、與へられた物に對して興味を感じた子供は保母の手引の中心となり、他の子供は自然的に且必然的に之に引きつけられて行くのである。かくの如くにして終に保母は、不思議にも思はれず、自分の組の小さい子供の幸福や満足の事を心配する事も無しに毎朝の會集をする事が出来る時が来る。そして朝の遊びや仕事の子供にも保母にも共に自然的にし

て幸福に發達して行くものである。

五、朝の時間の變化

子供を疲れしめないで、休養的な遊の時間ばかりを集める事が出来る様に遊戯を變化せんが爲に、朝の時間を短い間に仕切れることは今日迄の習慣であつた。之は吾々の手數を行ふ上には好い事ではあるが、稍々形式に流れて自由を縮少する事を承認する事になる。即ち保母の案が餘り多過ぎて子供の發意に従ふ事が尠な過ぎると思ふ。

多くの幼稚園の現状の如くに、目的に相應しない様な室の中に寄寓して居るのは、如何に自由な形式の手順と遂に混雜に陥つてしまふ様な結果になる事を承知して居なければならぬ。私は或る田舎で、立派な設備を持つて居る學校に附設せられて居る幼稚園を訪問した事がある。その幼稚園は可成の大きさの立派な室を占領して居たものではあるが、子供等が輪になるのに互に腕をつき合ふ程で、或るゲームの如きは子供が何人か輪の外に出て、極靜かな活動の爲にでも、のいてやつて傍觀して居なければならぬ程室に

一ぱいになつて居た。だから自由な活動などはこの幼稚園では思ひもよらぬ事であつた。かうした立場にある幼稚園は勿論澤山あつて、疑も無く之は改革に對する防止であるが、やがては公衆の意見と教育的理想との力に由りてその必要を感じしめらるゝに至ることと思ふ。

故に右の如く、止むを得ず我慢しなければならぬ障害があるに拘はらず、保姆はその環境の許す限り朝の時間の改革を始めて、個性の表現と身體的安靜の爲にもつと多くの自由を子供に與へねばならぬ。子供が康作の變化を要求する時にはいつでも、保姆が勝手に定めないうで、恰度子供が家庭に遊んで居る時の様に、子供をして自發的にさせればいゝのである。之は身體運動に對する設備が供給せられるば自然わかる時が来る事柄である。設備の事に關しては二つの障害が起ると思ふ。即ち經費と場所の問題である。前者は擴大せられた恩物の紹介によつて漸次かゝる準備が整へられるので、比較的容易く解決がつくと思はれるが、それよりもつと重大な問題は、適當な設備を容れるのに十分な、そして子供等の活動に自由の機會與ふるに充分な大

さの室を得る事である。之を達するには、絶えず此の題目に就いて議論を闘はず事、及公衆の輿論を變化させらるの外に路は無い。之に對しては、保姆は確呼として働き、母の會に於てその必要を説き、母を貫して此の考のその父に達せしめなければならぬ。

朝の仕事に對して定つた時間割を制定する事が不可能な事か、でないにしても少くとも賞讃すべき事ではない。どんな時間割にしても變化出来るものでなければならぬ。幼稚園の時間は市の異なるに従つて大に變化のあるものであるから、保姆は自分の隨意の時間に適する様に時間割を編まねばならない。

六、恩物の時間の延長

今日の時間割で特に改革の必要に迫られて居る點は、恩物を以て遊ぶ時間と、時々庭に出て働くのにあてがはれた時間とを延長する事であると思ふ。擴大した積木を使つた經驗のある保姆は、規定の半時間では、大きい方の子供にその材料を以て十分に樂しませるにも、之を有効に使用さ

せるにも不足を感じる事を屢々感じて来た事と思ふ。子供が疲れて来た時に、休息したり又は身體的發育を助ける所の設備で遊ぶ事が出来る爲に恩物の時間や子供の自由の時間を擴大する事は、單に子供に幼稚園の材料を一層有益に使させる機會を與へるばかりでなく、子供の自然的遊戯の活動によく一致する所の休息及び變化に就いて其の端緒を捉へさせる機會を與へるものである。斯る排列は能力の少い保姆の手を以てしては却つて不秩序を招き又は五里霧中に徘徊せしむる結果となるかも知れぬ事とは思ふけれども吾々は効果の無い事の爲に計畫することは出来ない。制御と任意との間に權衡を保つ事を目的として居る思慮深かき保姆は直ちに此の新らしき排列に適應し、此の一層自由なる方法に於て幸福を見出す事と思ふ。今日既に多くの幼稚園に於ては二つの室が供給せられあつて右と同様の方法が小さい方の子供に實施せられて居る。小さい方の子供は大きい方の子供よりも、もう一層自由が許されねばならぬといふ事を記憶して居なければならぬ。

七、小さい組の廣き使用

幼稚園では小さい組を以て仕事をする事の有利な事は能く認められて居て、其理想的排列である事を信するものであるが、而も未だその大部分は實現せられて居ない。之は恐らく學校當局の態度が變化するに非ざれば其實行は不可能な事であらう。併し乍ら考へのある保姆ならば此の大きな組の不幸な状態を極小にする爲には、僅か一人の助手を以てても此の問題を解決する事が出来る。仕事や遊戯の方法を一層自由にするのに子供を三つ乃至四つの組に分けても好い。さうすれば自然子供等に之に着手する大なる機會を與へる事が出来、且つ自ら自重及自制が發達して行く事であらうと思ふ。

朝の歌やゲームの爲に子供が一緒になる事は、皆が一緒になる唯一の時である。併し非常に大きな幼稚園の場合では、小さい團體でゲームをさせると随分満足な結果を得る事が出来る。幼稚園の色々な仕事の爲に子供が澤山に集る事は、正しい意味に於ての幼稚園の躰の總ての目的を破る

ものである。

八、遠足の爲に時間割を變更する事

朝の仕事の時間割は其の時間の量が變化出来るものでなければならぬ。過去に於ては餘りに時間割に括られて全く時間の秩序の崇拜者であつた。時間の秩序は勿論吾々にとりては總て學ぶ可きものであるけれども、夫れが爲に子供幸福を犠牲にしてはならぬ。例へば自然界へ遠足する事は幼稚園細目の大切な部分であつて、其周囲の都合が好ければ、氣候の許す限り少くも一週一回は行ふ可き事であつて、朝の時間割などを顧慮しないで遠足の意味に最も適した時間を使ふが好い。又興味の定まつたものとして例へば鍛冶屋、消防隊等へ遠足する事もある。かゝる遠足は多く朝の始か又は朝の終かに行ふ事が最も有利である。而して都合の最も好い時にかゝる仕事をするには朝の時間の秩序などの干渉を受ける事はない。他の言葉で云へば實施しなければならぬ仕事は時間割よりも一層大切な事であつて、時間の秩序は其仕事の前に捨てられるべきである。

九、試験的細目の價值

該博なる知識、大なる經驗、確實なる直觀、豐富なるお断を持つて居る老練なる保姆は幼稚園の仕事が進歩の跡を示し、終に纏つた全體を作りあける事が出来る様に毎日の生きた經驗を利用し、之に應じつゝ、日々の細目を展開して行く事に成功する事は可能であるが、不幸にしてかゝる保姆は例外である。經驗の淺い保姆が毎週々々注意深く編成せられた細目の助をからずして出發する事は好い事では無くして多くは不幸に終る。此の細目は保姆が之に全く依りすがつて其仕事を決定す可き固定的の提議では無くして、單に試験的の細目でなければならぬ。それは保姆が毎週又は毎月、其子供を研究し觀察して子供の發達の暗示を記入するものである。幼稚園の進歩、經驗及び子供の興味の命ずる所等の仕事として或は改革を加へ省略を施し乃至は又變更を要すべきものである。毎月末に於て自分の實施した處を比較して見る事は、保姆にとりては教訓となる事である。之は翌年の方針の新しい礎を形成して一屬完全なる實

行に向ふ可き捨石となるのである。

一〇、暗示的な一般の計畫

此の細目の排列に於て違はる可き一般の計畫は、實行中の仕事を都合よくするものである。例へば

- 一、其月の一般の題目。
- 二、此の題目の許に於て強めらるべき特殊の經驗。
- 三、數箇の經驗と聯絡して發達せしめ得る、嘯、詩、記憶詩、歌、遊戲及びリズム。
- 四、繪畫及び説明材料。
- 五、遠足、戶外生活。

梗概と云ふ言葉の配下には一つの危険の潜む事を承知しなければならぬ。其危険は他の關係に於て己に述べた處であるが、細目に子供の實際の要求に適した仕事の計畫が餘り少くして、却て知的産物が多くなり易いと云ふ事である。かう云ふ危険はあるけれど梗概は寧ろ若い保姆を規定の排列に保つ必要な案内であると思ふ。若い保姆として最後に注意すべき事は、常に嚴格なる考を持ち、子供の興味と

活動の光を以て細目の進行を注意深く看視して、危険に對して油斷なき事である。

子供と一週間も親しく交渉して見れば、子供等の或る共通の興味を認め茲に其の出發點を見出す事は困難な事ではないと思ふ。子供に接觸する點として子供の家庭生活や、親族關係を用ふる事は近年の稍一般に通じた習慣となつて居る。此の事は或る事情の許に於ては都合の好い計畫であるが、抽象的領域に陥らぬ様注意せねばならぬ。何となれば、幼稚園時代の子供が其精神的の食物とする所のものは活動であつて概括的のものでないと言ふ事を記憶して居なければならぬから。

一一、適用の例

或る保姆は子供の家庭に於ける興味や玩具や飼育動物などを其の接觸點とした。玩具は子供が能く幼稚園に持つて來て使つて居た。或る時犬が注意の中心となつたので、保姆は茲で大膽な犬のお嘯をする機會を發見した。又或る時は二匹の飼兎が興味の對像物となつて、“Raggylog”の

お嘶が大きい方の子供等に始められた。此のお嘶から母の愛を例證して、人間の家族、リスの家族、鳥の家族、兎の家族及び小猫の家族等の繪に由りて極簡單に家族關係に説き及ぼす事が出來た。灰色のリスは特に子供等の親しんで居た所であつたので、リスの家族のお嘶から親の心遣や子供の從順の考へ等に深い印象を與へたやうであつた。其の保姆は此の程度の發達の子供には、其の諒解の程度は繪とお嘶とで充分であると信じて、家庭關係に關しては更に之以上進行させなかつた。

翌月は、恰度子供の興味が著しく自然界に向つて居たので、之を以て其の月の仕事の計畫を立てた。其幼稚園は其周圍の關係が戶外生活に都合が好かつたのであつた。先づ庭に出る事が其出發點であつた。其所では或る子供は植物から種子を集めて居り、又或るものは幼蟲と幼蟲のたべる木の葉とを探して居た。其の木は其翌日子供等が其のお客の幼蟲に食物を與へる爲であつた。幼蟲は室内に持つて歸つて大きなガラス張りの箱に飼つてあつて、其所で子供等が其繭を作るのを觀察する様にしてあつたからであ

る。日が進むにつれて南の方に飛び去る鳥の群が子供の注意を惹く様になり、其空巢が目に着く様になつて來た。之は單に飛び去る鳥に興味を導くのみならず、冬中残つて居る管の鳥を子供等が見る機會を保姆に供給したものである。何所にでも居る雀は別として、カケス、ハトの二つの著しき種類が觀察された。又鮮かな木の葉は絶えざる興味の源泉であつた。而して遂に木の葉が落ちて木が裸になつた時、保姆は其の大きい方の子供を戶外に連れ出して、何が木の葉を地に飛ばすか、如何にして自然が、冬を貫して新しい木の芽を保護するかを觀察せしむる事が出來た。

是等の種々なる戶外の冒險には規定の時間は置いて無く、自然界に於ける變化に由りて刺激せられたる子供の興味が其の決定素として働いたのである。其月の中頃になつて子供等は其のお庭から僅かばかりの野菜物を收獲した。それから市場に連れて行つて農夫の收獲の更に大なる産物を子供に見せた。一人の小さい子供が如何にして草原にレキをかけて父を助けたか及び之に加ふるに其の他の子供等の仕事が家庭に於て役に立つ事などを話して、此の季節

に於て觀察せられた總ての事柄の意味——冬の用意——を思ひ起させた。

是等の例は、細目が如何に子供の経験から出發し得るか如何に子供等は、種々なる本質的關係に慣れしむる様に出來るか、又如何に其の経験を餘り擴大して未だ用意の出來て居ない抽象的事柄を子供に投げつける危険に陥ら無い様にすれば、其年齢と理解力とに應じたる反應を子供に與へる様になる所の活動性を信用し得るかを示すに足るのである。

色々の見界から見て都合の好い境遇にある子供の生活に於て、吾々の接觸點として價值のある事柄を選択する事は比較的簡單な問題である。併し是は文明生活の要求の如何なるものにも應じない様な境遇に居る子供等の粗を取扱ふ場合になれば全く異つた提案である。長屋の中で二三の汚れた室が其の家庭であつて、其所では家族の關係は至められ、家族の生活はさまよふて居る様な家庭の子供に家庭生活の理想を打ち込む事が時として不幸にして、或は知らずに企てられる事であるが、之は其の準備を持つて居ない經

験を子供に與へる事になるので、恰も土の用意の出來て居ない所へ種子を播くのと同じ道理である。

是等の子供の興味は時として悪く變ぜられて居て、其の爲に保母は新しくてより良き興味を起させる様に工夫するの必要を認むるのである。時には是等の子供は食物が不充分で榮養不良に陥り爲に鈍くて愚鈍で保母が適當なる出發點を見出すのに困る事がある。しかも尙是等の子供と雖も、もつと好い境遇の子供と同等の性質も乃至は子供一般の特質も所有して居る事は解つて居るのだから、保母としては是等の子供の爲に擴大せらるべき機會を供給する事である。又彼等に、其の發表する所が遂によく培はれたる植物に於ける健康なる蕾として表はれて來る様に日光の如き溫き愛情と同情とを注ぐことである。此の幸福なる特權を持つ事の出來た保母が果して幾人あるだらうか！

或る保母は暗示的方法に由つて此の種の子供の要求に應じた。此の保母が利用し且つ子供に供へた所の経験は單に想像し得るのみである。最初の週には其の團體と知り合はなる事及び自分も人も共に新しい境遇に居るのだと云ふ事

を子供等に自覺せしむる方法を取つた。是等の子供と一緒に生活する事を望ましくするか或は少くとも一緒に生活するに堪へ得るものとする爲に第一に教へなければならぬ事は清潔であつた。保母はとて清潔といふ事を言葉で説き聞かせる事は出来ないと思へ、何か子供等の心をして清潔の理想に醒めしむ可き具體的方法を講じなければならぬ事を悟つた。サツパリとした顔の人形、それは優しく模造せられた手を持つて居り、汚れて居ない極簡単な衣服の着せてある人形と、汚れて居ないリンネルで仕度せられた人形の寢床とが此の目的に適つたのである。人形は直ちに刺戟を與へた。人形は結構な風姿なまをして居て、其の總ての良い點は子供等に注意され、其の汚れて居ない手と爪とは子供等の汚れた手と其の黒い爪を例外とする事なしに恥かしめる事であつた。其清らかな着物は皺だらけの着物を整する事に導き其の波打てる髪は亂れて居る毛髪を滑かに櫛削る様に導いた。人形の寢床を拵へる事は奇麗にする事と整頓する事との興味ある課業となつた。此實驗の効果は直ちに得る事は出来なかつたが其價値は漸時にして遠永に認め

られた所であつた。

人形の代りに金魚の鉢が續いて子供等の前に表はれた、それは男の子が何か自分等で氣を付けるもつと特殊の物を持つて缺けて居る事柄に暗示を與へられんが爲であつた。

「私共は斯うして着物を洗ひます」の遊戯は時として「斯うして顔を洗ひます」「斯うして髪を解きます」等に代らしめて良き結果を來さしむるのであつた。

是等の子供に對しては自然界は僅かの事しか教へられなかつた。子供等の運動場は歩道と溝とであつた。公園は一學期に一回の訪問しか許されない程遠かつた。自然の如何なる形象にでも、若し子供が接觸すべき機會が來れば保母はいつでも子供等に之を持たせなければならなかつた。幼稚園に持つて來られた各季節の野生の花は既に美についての課業を授けつゝあつた。場所は飼育動物を容れる事を許さなかつたし、資金には限りがあつたので、始めに僅かの毛蟲が幼稚園に持つて來られて鋭き興味の對象物となつた。次に子供の助けを以て十二本の植物が窓箱に移植された。其の次に公園に遠足した。其れは並大抵の努力では

無かつた。けれども其一回は十分の價値を求める事が出来た。木の實や木の葉が澤山に集められて幼稚園に持つて歸られた、池に泳いで居た立派な鷺鳥、草原に飛び廻つて居たリスは子供の注意と記憶に於て大なる要求をし、而して其の次の日の仕事の出發點となつた。ある玩具の鷺鳥とあひる——慥か日本の玩具——と水を入れた鉢とは其の後長い間心からの喜びを供給した。

月の終りに於て水仙とヒヤシンスの球根が子供等に由りて植えられ、そして其月は終つた。其の間に子供等の生活は稍擴大せられ豊富になつた。保姆は子供の興味を喚起するに役立つ材料を探す爲に近所を歩いて二つの貴重なる興味の對象物を運よく捉へた。それは空地に繋がれた牝牛と鳩とであつた。之等の對象物は適當なる歩行距離にあつたので自由遊びやお嘶や歌などの出發點を供給した。而してかくして感謝祭へ楽しく近づく事が出来た。是等の子供の生活は非常に制限せられて居た爲、幼稚園にとつては、子供等に感謝祭を如何にして意味あるものたらしめる事が出来様か、殆んど見當のつかぬ位のものであつた。然るに幸福

にも保姆は、如何に子供等が、「有難う」の日の精神を諒解する事が出来たかを知り、又子供等にとつては天與の喜びであつた所のどんなに澤山なものを其の貧しい小さな生活の中に見出したかを知つて驚いた程であつた。其の祭の日は子供等にも母親達にも共に鋭き喜びの朝を示した。友達の親切を貰して貢獻せられたる、果實に對しての子供等の興味は最近の公園の訪問に由つて明らかになされた。櫛の實と同じ様に林檎が木になつた事、芋が土から出て來た事、雨と太陽とが非常に生長を助けた事等は秋の收穫たる是等の果物に對する子供等の喜びから自然的に發達して來た觀念であつた。

十二月には新しい問題が起つた。子供等は殆んど全部が猶大人で希臘教系のものであつたので、クリスマスのお祭は勿論不可能であつた。是等の子供等がクリスマス季節の喜びから除去されなければならぬと云ふ事は保姆にとつては實に悪い事に見えた。保姆は此の問題に就いて熟考して遂に意を決した、假令子供等はクリスマス氣分の喜びを見捨てなければならぬとしても、其の季節の精神を取り去ら

ぬ様にしなければならぬと。で其結果としてお正月の集りをとつた。而して十二月の月は近所のクリスチャンと同じ様に、お父さんやお母さんへの贈物の爲に忙しい働が全幼稚園に漲つて居る美しい奉仕の精神を見出し得た。

切抜の成績である所の紙の人形は子供の絶える喜びの泉源であつた。而して今やこれが人形の家に發達して行き偶然にも、不幸にして是等の子供に缺けて居た家庭の仕事に就いての考へに其の道を開いた。お室を作る事は先づ積木を以て始められ、此の遊びで人形は澤山に作られ、澤山の客室が必要となつて来た。之等の遊戯は續いて大きい方の子供の仕事になつて来て、厚紙で實際に澤山の道具を作つた。斯くの如くにしてお臺所、食堂、寢臺、居間等は之等の小さい子供の職業的の指で展開された。紙人形の遊びに由つて各室の用途が分つて来た。家が完成した時には此の家は自由遊びの時間に於ける子供の自由の處分に任せられた。かくして家事は一月の月の題目となり而して子供等の活動を貫して展開せられた。

私は是以上此の説明を進めるの必要はないと思ふ。何と

なれば、以上の叙述に由りて示したる細目の展開は、取扱つて居る子供等の要求より自然的に生じたものであると云ふ論點を強むるに足る事と信ずるからである。研究の結果得た細目を子供に強むる事があるかも知れぬが、其れは子供等の毎日の經驗と要求とは何等生きた關係を持つ事が出来ないものであるから従て良い結果を得る事は出来なぬ。保姆は皆自分自身の細目を以て仕事をしなければならぬ。さうすれば子供の要求と生活とに一層密接に觸れて來る様になるのみならず保姆自身も其の過程を貫して生長するのである。彼女の仕事は斯くの如くにして二重の考に於て活氣付けられて來るのである。其仕事に於ての喜びと興味とは其れに由りて増され而して成功の喜びは彼女のものである。おきまりの方法に従つて、其饑へおのゝいて居る生活に活氣付ける事も無く、又自分を信頼して任かされた子供等の生命を導き且つ間接に之を形作る責任の喜びを受けもしなければ、又果しもしない様な保姆の仕事は全く單調にして死んだ様なものである。

奉仕の責任の感を持ち、單に教へるといふ技術を超越した理念を以て幼稚園の事業に入る婦人のみが満足なる永久の成功を果すものである。

夏

東京女子高等師範學校教諭 堀 七 藏

夏といへば誰でも暑いと聯想する。暑いといへば夏を考へる位であります。しかし夏だから暑いのか、また暑いから夏といふのか、一寸判断が明白でない方も世間には少くないでせう。更に夏はどうして暑いのかといふ理由になると一層明白でないといふ方が多くはありますまいか。

元來、我が地球が太陽の周圍を運行するに一定の軌道があります。この軌道は正しい圓ではなく、橢圓形をなしてゐることは天文學の教へる所であります。而してこの橢圓の軌道を地球が運行するが、太陽が橢圓の中心の一にある關係上、四季によつて地球が太陽に近い時と遠いときとある筈であります。それで太陽に最も近いときは北半球、即ち我等日本人には冬であり、太陽に最も遠いときは夏であることも天文學の教へる所であります。

換言すると夏は冬に比べて太陽からは遙かに遠いところを地球が運行してゐる譯であります。それで夏は太陽に遠くて暑いといふのでありますから、益々不思議なことになりませう。

二

ストーブでも火鉢でも近い程暖いことは吾々が常に經驗する所であります。然るに地球が太陽に最も近い冬が寒くて、

遠い夏が暑いとは實に不合理極まる譯であると思はれるが、果して眞實でせうか。天文學によると、夏は地球が太陽に最も遠く、その距離は三千八百六十四萬九千里位あり、冬は太陽に最も近く、その距離は三千六百三十七萬二千里位である。従て夏は冬よりも遠いこと百二十七萬七千餘里ある譯であります。近くて寒く、遠くて暑いのは如何にも不思議であります。しかし考へると夏で高い山は白雪を戴き、高空が寒冷なることを思ふと當然のやうにも考へられるではありませんか。平地ではいや扇風機だとか、氷水だとか、アイスクリームなどを要求する位暑いのに、高山では凍死する位に寒く、飛行家は夏でも厚い毛皮の外套を着込むことを考へると、太陽に近い方が却つて寒いから、夏太陽が遠いとて問題ではないかも知れません。

三

まともに敵むと恐しいが、横見に敵むと却つて愛嬌がある如く、太陽も頭のテツペンからかんく照すと恐しく暑いが斜に照すときは左程ではありません。丁度夏は太陽が眞東よりも稍北にかたよつて出て、吾等の頭上をまともに照らすので非常に暑く、冬は太陽が南に片寄つて出て、南の空を通つて斜に吾々を照らすから、暑いよりも寒いのであります。それで夏は太陽に遠いにもかゝはらず、太陽が頭上より直射するので暑いのであることを理解せねばなりません。

さて高くて太陽に近い高山が寒く、太陽に遠い平地が暑いのは一體如何なる譯でせうか。

四

太陽から来る光は空氣を通り抜けて地上に達するものであります。火箸の一端を熱すると段々他端に熱が傳つて次第に熱くなるものであります。これとは全く異つてゐます。太陽より来る光熱は眞空のところは勿論、途中の空氣を熱する

ことなしに、通り抜けて地面に達するものであります。それで太陽の光熱によつて空氣の熱せられないことが分りますから、飛行家が天空を飛ぶとき防寒具を着用せねばならぬ理由が明白となりませう。所が地面は太陽の輻射線を晝は盛に吸収いたします。海岸の砂が燒くが如く熱く、屋根瓦でもトタン屋根でも手をつけられぬ位熱くなりますのは、皆太陽の輻射線を盛に吸収するからです。尤も海水とか田の水などはこの輻射線を吸収する割合が少く、熱せられる割合に温度も昇らないものでありますから、海岸の砂は燒けてゐても海水は冷く清々した氣持がいたします。皆さんが夏海水浴をなさるのはこのためです。また庭に打水をして涼しくなるのはその水が蒸發するために地面の熱をとるからであります。

兎に角夏は直射日光のために地面は非常に暑くなります。

五

夏地面は著しく熱せられることは明白な事實でありますが、この地面に觸れてゐる空氣は地面の熱をとつて膨脹して上昇し、上方の空氣が交替して更に熱せられるといふ工合になつて、地面に近接せる空氣は温度が昇り、華氏の九十度以上にも昇るのであります。尤も華氏の九十二度は攝氏の三十三度三分位で、吾等の體温三十七度よりも低いのでありますから、砂や地面が燒けて手もつけられぬ位の温度に比較すると、お話にならぬ位であります。しかし人間は周圍の空氣が三十度以上になると、暑いといふのであります。兎に角夏地面に近い所の暑いのは燒けた地面に接近せる空氣が地面の熱によつて熱せられるからであります。夏日路面より立昇る陽炎は、この熱せられて上昇する空氣が太陽の光を反射して起る現象であります。かくて平地が夏暑いといふ理由が明白になつたと思ひます。尙ほ高山の寒いのは雪がふるからではなく、全く太陽の光線を吸収する地面が狭く、多少地面の吸収する熱も周圍の空氣に奪去られるが爲に、地面も空氣も一向に温度が昇らずして寒く、従つて萬年の雪が白く残つて充分とけ去らないのであります。

如何なる玩具を選ぶべきか

山内 俊次

はしがき

こゝにかういふ題を掲げましたが、勿論之は幼児に與へるべきものとしての意味に外ならないのであります。

私は平生から玩具につきましては、之を幼稚園におきましては小學校におきましても、もつとく大いに教育的に有効に利用することに心掛けねばならぬと思つてゐますが、どうも我が國の現状から見ますと、それがあまり具合よく行つてゐない様に思ふのであります。最も幼稚園の方は、或は小學校の方よりも稍よく行はれてゐるかとも思ひますが、小學校に至つては、一般に先生からして、かうした玩具などを遊ぶことはあまりに幼稚すぎるではないかといふ様な感じを有つてはないかと思はれる節がないで

もありません。

玩具と申しましても、實にその種類が多様で、なるほど幼稚なものもありますが、中々どうして非常な高尚なものも多々あります。従つて幼稚園向きもあれば小學校幼學年向きもあります。更に中學年向きもあれば上學年向きものもあります。凡そその種類をざつと分類して見ますと、ざつと次の様です。

玩具の種類

三越あたりで販賣の便宜上、幼児向きのものと、稍程度の高いものとの二つに分けて、前者を普通玩具と稱し後者を理工玩具といつてゐます。又一面からは靜的玩具と動的玩具とに分けることも出来ます。日本在來の人形とか、お

勝手道具の模型のやうなものは前者であるし、獨樂とか、電車自動車のぜんまい仕掛の如き類は後者に屬します。又形の上から見ると、生物をとつたものと、器物をとつたものとに分けられます。又他の方面から見ると、物性を應用したもの、力學を應用したもの、乃至は、光學、音響、電氣磁氣等物理的現象を應用したものもあれば、化學的現象を應用したものもあります。

之は極めて漠とした、常識的の分け方ではありませんが、兎も角、有名な米國のギルバート會社製造にかゝるギルバート理化玩具といふものは、頗る科學的なもので、立派な小學校教授の教材としての價值が充分認められてゐます。そのためにもギルバート理化玩具といへば、今日では世界的に其名が知られてゐるのであります。

これは何處にもそなへて、兒童教育上盛んに利用したいものでありますが、全部と一のやうとすると、大分けにして三十餘種類になり、その代も二百五十餘圓にのぼるといふ様な事情で、何處でも容易に買ひとゝのへることは出來ないのであります。

けれども、私がこゝに述べやうとするのは、小學校向きのものではなくて、大いに幼稚園向きの玩具についてあります。

幼兒の玩具

震災前東京市の玩具商は實に一千數百軒であつて、その看板には、教育玩具などと記したものが多かつたのであります。その實玩具の内容が盡く教育的であつたかといふと、決してさうでない。中には非教育的なものも随分多かつたのであります。

それでも買手の方の玩具に對する知識の乏しいお蔭で何れの玩具もその賣行きがすばらしい情勢であるといふ實情であつたことは、いさゝか遺憾な點であつたと思ひます。三越丈の玩具部で、一日の賣上高が、實に三萬圓からあるといふに至つては、それが悉く教育的に有意義なものばかりであるとせば、國家の爲め甚だ慶賀すべき現象と思ひますが、あまりさうした選擇上の見識もなく、無暗に我が子としての代價の如く購ひ與へるが如き傾向のあつたこと

は、私共の甚だ遺憾なことであつて、世の母たり父たる人の猛省に値すべき重大事であると思ふのであります。

玩具の選擇

私は自分に子供といふものを持たないのでありますから、どうも私のいふことは空論になりはしないかといふことを常に心配します。ですから努めてさういふ點には留意してゐるつもりであります。私は曾て、とある友人の五歳になる女の子をともなつて堤防を歩きました。その時川舟に竿さして、下り行く船人を見つけて曰く『お人形さんのつてくの？』

なるほど未だ經驗といふものが甚だ乏しい五歳の子供として、天氣がカラツと晴れて、空氣が透徹したやうな初夏の朝、はつきりと大川の真中に、其の大川に比較して割合に小人に見える船人に對して、實に五歳の子供は眞面目にこれを人形と考へることは、さもありさうなことであると、私はつくづく考へさせられました。

子供は子供の想像の世界があります。そしてそれは子供

如何なる玩具を選ぶべきか

獨特のもので、大人としては到底向知るよしもありません。ある音楽家が述懐して曰く『私は三四歳の頃から母の側にて、母がピアノによつて練習する度毎に、その白いキーが一マイルも遠方まで連つてゐるやうに思はれてなりませんでした』と。

これは小さなものを過大視した例であります。實に如實に幼児の時の記憶をそのまゝあらはしたものだと思ひます。

かうした世界に、遊ぶやうな幼児のための玩具は到底大人の考へ及ばない所に興味をもつであらうと思ふのであります。

獨逸に於て五百人の子供に、彼等の最も好める犬の畫を描かせ、其特徴を採つて玩具を作り、それが非常な勢で歡迎されたといふことであります。大人が見ては不備なものでも、子供の世界にはあまり不審がらない。大人の考へては如何にも精巧に出來てゐても、それが必ずしも子供の喜ぶ所以ではないといふやうな事實は、非常に多いと思ひます。これらは玩具選擇上甚だ困難な問題であつて、又甚だ

大切な事柄であると考へます。

けれども私は、右に述べた様な考への下に、又一面に於ては、幼児將來の教育の上から、彼等の最も親しみやすい玩具によつて、或は物事を建設構成し、又之を破壊するといふやうな性能を満足せしめ、新規を好んで追ひ且つ不思議を却つて歡ぶといふ氣風を助長せしめる等の効果を充分發揮せしめる様なものを選びたいと思ひます。

X X X X X

私は玩具本來の目的價值の上から幼児に與ふべきものは如上の要件に適合するものを選びたいと思ひますが、茲に又別な方面から、小學校へやがて進まんとする子供のために、多少彼等の旺盛になりかけた求知心を満足せしめ、且つ小學校への準備教育といふべき程のものではないが、不知不識の間に準備になる様な性質のものを選ぶことも亦有意義のことと思ふのであります。

幼稚園に子供を入れない世の親が、「幼稚園に於ては小學校の準備をするのであるから、家庭に於てもそれに對して適當の準備をしてやらねば子供に相濟まぬ」といふ様な全

く見當の間違つた考への下に家庭に於て小學讀本を讀ましめたり、或は算術の準備であるとして子供にとつては甚だ迷惑な無理を強うるが如き事がまゝある様に思ひます。これは子供として果して適當な要求でありませうか。決してさうではないと思ひます。私共はかうした無理なことは有害無益なことゝまでいひたい。子供の自然の欲求を満足せしめつゝ、それが小學校への準備になる様なものがあれば、それは矢張り妥當な方法であると思ひます。それには玩具を利用するといふことが最も都合がよいと思ふのであります。然らば如何なる玩具がよいか。實例を一々あげるとよいのですが、これは改めて又稿することゝいたします。

會 告

本誌八月號は、九月に於て、九月號と合した、倍大の量と質の充實を以て發行することにします。御承知を願つておきます。

お春

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

一置ランブ

感謝祭の日に、午後一時の中食に、お春のうちではお客があつた。馬場家の姉妹で、北河崎と佐伯村との中間に住んでゐるのだが、毎年、感謝祭の日には、田中の家へ招かれて來るといふのが二十五ヶ年以上例になつてゐた。お春は、食事の後片付けを済ましてから、黙つて本を讀んでゐたが、夕方五時頃になつて、下山の家へ行つてもよいかと尋ねた。

「感謝祭の日なんかには、何だつて下山の子供達に遇ひたがるのさ。一度位おとなしく坐つて、長者の有益なる談話を聞いてゐられさうなものだに。御前は、ちつとも、獨りでぢつとして居られないで、始終、あちこち動きたがる。」とおみね伯母さんが言つた。

「下山の家に、新しいランブが出来たので、おしまさんと私と、行つて、燈火の點く所を見て、一寸、會をしやうツて約束したんです。」

「一體全體下山の家でランブなんかを如何しやうつていふのさ。何處から、買ふお金を貰つたらう。もし、あすこの親父が在宅なら、持ち出して何かと交換してしまふだらうにさ。」

「子供達が石鹼を賣つた賞品に取つたんです。一ヶ年位かゝつてやつてゐたんですが、伯母さんが御葬式にいらしたあの日に、おしまさんと私とで、賣るのを手傳つたのだと伯母さんにお話したでせう。」

「そうかね。氣に留めて聞いてゐなかつたと見えて、ランプの事は初耳だよ。ぢや、一時間行つてお出で。それ以上はいけない。六時頃は夜半位暗いからよ。少し林檎を持つて行くがよい。おや、その新しい着物の、衣袋に何を入れてるの。かくしがダラリと下つてゐるぢやないか。」

「お晝食の時に出了た『くるみ』と干葡萄です。伯母さんが私のお皿に入れて下さつたの丈です。」とお春は答へた。この子はどんな罪のない行爲でも、おみね伯母さんに隠し了せた例がなかつた。

「何故食べなかつたの。」

「御馳走を他に澤山食べたから。それに、これを貯つて置いたら、下山の家の爲にもよからうと思つて。」とお春は吃り吃り答へた。他人の前で、叱られたり、問ひ糺されたりするのが厭でたまらないのだつた。

おみね伯母さんが中に入つて、

「お前のだから、他にやらうと思つて貯つて置いてても差支ないだよ。今日は、自分達のうけてゐる患みばかりを考へないで、他所の人にも感謝の念を起こさせるやうな事をして上げないでは、すまない日です。」

馬場の姉妹は、お春が出て行く時に、お春の行爲を是認する意味でうなづいてやり、暫く見ないうちに、見違へる程大きくなりまた良くなつたといつて賞めた。

おみね伯母さんは、

「同じ家に暮らして居ると分るんだが、良くなる餘地はまだく澤山あるんですよ。あの子は、何へでも首を突込んで……いえ突込むばかりぢやない、俄鬼大將になるんでね、それが何か悪い事つていふとなほのこと。……しかし、およそ何が馬鹿氣てゐるつていへば今のランプには呆れるね。下山の家の者のやりさうな事だが、あそこの子供達に商賣をする頭腦があらうとは思はなかつた。」

「一人はたしかに商賣上手なのでせうよ。北河崎の荒田の家へ石鹼を賣りに来た少女こどもの事を、一郎さんが實に愛嬌のある目立つ子だと言つてゐましたもの。」と、馬場のおれんといふのが言つた。

「下山のお倉の事にちがひないが、あの子を目立つ子だなど、は言へないね。一郎さんは、このごろ歸つて來てゐるの。」とおみねが尋ねた。

「えい。この二三日荒田の叔母さんとこに泊つてゐますよ。何でも、今ぢや、いくらお金が儲かるんだか分らない程なんだつて。それで、來るたんびに近所の人に、御土産を持つて來るんです。こんどは毛皮を一揃へ荒田の小母さんに持つて來たのですよ。もとは、あの人、着換へのシャツもなくて素足で居たんですのに。でもあれだけ御金があつて、御嫁さんを貰はないのは妙ですね。子供が大好きでいつでもぞろぞろ連れてゐるくせに。」

およねは、微笑んで、

「『まだく分りませんよ。三十を越してはしないでせうから。』」

「あゝ、年が百になつたつて、この河崎で嫁になりては澤山ある。」と、おみねが言ふ。

「一郎さんの叔母さんが言つてましたよ。一郎があの石鹼を賣りに来た少女こども（お倉つていふんですつて？）を可愛いがつてクリスマスには贈物をやるんだつて言つてゐるつて。」

「藜食ふ蟲も好きくさね」と、おみねが言つた。「お倉は斜視やまにらみで紅髪あかけだわね。もつとあの子がクリスマスに贈物をもらふ邪魔をする積りは私はちつともないんだが。一郎さんが與あづかればそれだけ此村が樂らをするんだから。」

馬場おいは、

「下山に他に娘があるんでせう？ 賣りに來た子は斜視やまにらみではないんですよ。淺野の小母さんが、一郎は、その兒の眼が美しかつたと言つてたといひましたもの。三百個も石鹼を買ふ氣になつたのも、その眼のせいだと言つたそうですよ。荒

田の小母さんは、物置にその石鹼を積み上げましたわ。」

「三百個！」とおみねは絶叫して「此の河崎に盡きないものが一つある！」

「それは何ですの」と、おいとが謹んで訊くと、

「馬鹿の種子たかさ」と手短かにいつてのけて、おみねは話題を轉へた。およねは、先刻から氣が揉めてビクビクしてゐるところだったので、やつと安心をした。およねは

「お春でなくて、此河崎に、愛嬌があつて目立つ少女といふものが居よう筈がない。お春でなくて、そんな綺麗な眼の子があらう筈がない！ お春でなくて、どうして／＼何百個といふ石鹼を人に買はせる事が出来るもの乎」と考へてゐたのである。

.....

お春は黄昏時の路を飛ぶやうにして行くと、やがて、せわしない足音が聞こえて、見馴れた人影が、向ふからやつて来た。それは、金子おしまだつたので二人は、息もつきあへず談話を初めた。

「大變な事が出来たのよ」と、おしまが、せい／＼言ひながら切り出すと、

「まさか、破こぼれたんぢやないでせう。」と、お春が受ける。

「いゝえ、いゝえ、そうぢやないのよ。薬に包まつて一つ一つちやんと出たのよ。私行つて見てゐただけけれど、あなたが、三百個賣つたお蔭で、ランプが来たんだなど、それや一言だつて言はなかつたの。二人一所の時に話さうと思つて。」

「二人で三百賣つたのよ。あなただつて骨を折つたんぢやないの。」と、お春が言直をした。

「いゝえ。そうぢやないわ。私は門のところで馬の手綱を持つてゐただけよ。」

「それだけれど、北河崎まで私達が行かれたのは、誰の馬のお蔭？ そうして丁度あれが私の番だつたからよ。あなたが

もしアラガンさんに面會したとしても、やつぱりランプは貰へたんだわ。……大變な事つて何？」

「下山の家に石油もおもしもないの。あすこの人達はあの置きランプは、ひとりでに、火がお点つて油がなくても燃えるものかと思つてるのでせうよ。シーソーさんが、芯を借りにお醫者様のとこへ行つたの。うちの母さんが私に石油を三合位下すつたけれど、もうあとは、やらないつて仰るの。ランプをつ点ける費用の事は私達も考へなかつたのね。」

「さうなの。いゝわ、そんな事、今夜の會がすむまで心配しますまいよ。私、くるみだの、干葡萄だの、林檎だのもつて來たの。」

「私は薄荷と楓糖を持つて來たわ。下山の家ぢや今日、感謝祭らしい御馳走を食べたのよ。御醫者様のとこから、御さつと蕪膏とつるこけ桃を貰つてね、うちから牛肉をすこし、それから幸兵衛さんところから、鳥の肉と、刻み肉を一鉢貰つたの。」

X X X X X X X

五時半ごろに、下山の家をのぞいてみる人があつたら、その會がたけな閑なのかわかつたらう。下山のおかみさんは、臺所の七輪の火が消えてしまふのもかまはず、赤ん坊を抱いてその席へ出て來た。まるで、ランプがお客を招いて接待をしてゐるように見えた。子供達は、家中にたつた一つある臺を持出して、ランプの臺座にするつもりで、座敷の遠い隅に置いた。その臺の上に、その尊い有難い望みの品が鎮座ましましてゐた。美しい事は廣告にかいてあつた位に美しく、大きさは廣告の半分程であつた。眞鍮の部分は、黄金のやうにきらめき、眞紅の紙傘は、巨大なルビーのやうに光つてゐた。ランプから放射される光の中に、下山の家族が、謹み畏かしこんで座つてゐた。そしてその後ろに、お春はおしまと手をつないで立つてゐた。誰れも談話をする氣がなかつた。その光景があまりに莊嚴で口をきく事も出来なかつたのである。一同は、心の中で、このランプのおかげで、このまゝとるに威嚴がつき、このランプがあるだけで自棄ピアノだの樂隊をきいてゐる様

に興が湧くのだと思つた。

「父さんに見せたいね。」と下山お倉は、さすがに、親の事を考へて、そいつた。

「父さんがみさら、また、何かと、そりかへるよ」と、舌たらずの鈴ちやんが、こまちやくれた口をきくのだった。

約束の時間が来たので、お春は、この魅せられるやうな場面から、いや／＼歸り途についた。

「あなたとおしまさんとが家へかへり着いた時分に、このランプを消すわ。丁度いいのね、あなた達二人とも家が近いから、私のうちの窓からランプのあたりが映してるのが見えるわ。毎晩きちんと一時間しかあたりを點けないとしたら、油を注さないで幾晩もつでせう」と、おくらが云つた。

丁度その時シーソーが物置から出て来て、

「石油がないつて心配することはない。うちの物置に一樽来てゐる。運送屋が、誰だか手紙で註文してよこしたつていつて、北河崎から届けて来たんだ。」

お春は、おしまの腕を掴むと、おしまも嬉しさうにお春のを掴みかへした。そして二人で門の方へ走け出しながら「きつとアラデンさんね」と囁きあつた。シーソーは二人について来て、そこらまで送つて上げやうと言ひ出したが、お春がきつぱり断つたので、無理にともいへなくなつて、仕方なく、お春の夢でも見ようと床に入つてしまった。その夢に、お春の両眼から電光が出てそしてお春は両手に火の劍をもつてゐた。

お春は、いそ／＼と、自宅の食堂に入つた。馬場の姉妹はもう歸つてしまつてゐて、伯母達二人が編物をしてゐた。

お春は帽子とマントを脱いで、

「何ていへないよい會だつたのよ。」

「も一度行つて、戸をよく閉めて来たかどうか見ておいで。そして戸締りをして。」と、おみねは、例の嚴しい態度でやり

出した。

お春は氣が立つてゐて黙つてしまへないので、戻つて來てからも。

「何ていへない、會だつたのよ。伯母さんもおよね伯母さも、一寸お勝手へ來て『流し』のところの窓から見てもらんなさい。ランプが赤く光つて、まるで下山の家が火事になつてるやうなの。」

「きつと、いまにほんもの、火事でも出すんだらう。あんな、くだらない眞似をして、ほんとに呆れるね。」とおみねは言つた。

およねは、お春について臺所へ行つて見た。遠くの方にほんやり紅く見えてるだけで、華やかだとは言へなかつたが、およねは、つとめて感心したように見せかけてゐた。

「お春や、北河崎の荒田のうちへ石鹼を三百賣つたのは誰だい。」

「北河崎の誰ですつて。」

「荒田つていふ人。」

「そつういふ名の人の。」と、お春はびつくりして、

「アラダだつて、私割りによく當てたわね。」と獨りで小聲に笑つてゐた。

「荒田の家へ石鹼を賣つたのは誰だと、伯母さんが訊いてゐるんぢやないか。」

「荒田、アラデン、何て面白いんだらう。」

「返事をおしなさい。」

「あ、御免なさい。私考へてゐたもんだから、おしまさんと私とで賣つたの。」

「お前、しつこく頼んで、無理に買つてもらつたのかへ。」

「まさか、伯母さん、大人の人に、厭いやだつていふのを買はせる事なんか私にや出来ないわ。あの方ね、自分の伯母さんに上げるんで、是非石鹼が入用なのだったよ。」

およねは、まだ少し合點が行かぬけであつたが、口では、

「おみね伯母さんが何ともいひなさらねばいゝが、あの伯母さんはなか／＼やかましいからね。何か、かはつた事をする時には、先に一寸伯母さんに話した方がいゝよ。お前のする事はすいぶん變だから。」と言つた。

「あの事は何にも變ぢやありませんよ。」と、お春は打明ける風に「おしまさんは自分の親類と幸兵衛さんに賣つたの。そして私は、木挽場のそばの貸長屋に始め行つて、それから荒田さんとこへ行つたの、そうしたら、荒田さんが、ありつたけ買つてしまつて、そして賞品が来るまで、黙つてゐろといつて約束をさせなすつたの。だから私話したくてしやうがないのを我慢してゐたから、まるで私のお腹の中であのランプにあかりをつけて燃えてるやうだつたの。」

お春の髪はとけて波をうつて頬のところところに垂れて來てゐた。その眼は光り輝き、その頬は眞紅になつてゐた。その顔には、敏感、遠慮深さ、熱烈さ、などがほの見えてゐた。そこには椿の花の麗はしさと、若い檨樹かしはの強さがあつた。

「ほんとにさ、今日のお前のその顔つたら、お腹の中にランプが點いてるさうだよ。あゝ、お春や、お前はさう、ものに眞剣にならないで居られるといゝんだが。伯母さんは、時々お前の上が柔じられてならない。」

本年の文部省夏期講習會

一、幼兒期の心理 十二時間 東京女子高等師範學校教授 吉川竹二

一、律動及表情遊戲理論と實際 東京女子高等師範學校囑託 土川五郎

1 理論 二時間

2 實習 十時間

會期 自 七月廿五日
至 七月卅一日 六日間

詳細は六月廿五日
の官報を見られよ

場所 東京女子高等師範學校内

編輯だより

夏が來ました

○夏が來ました。どこの幼稚園にも暑い／＼の聲が多くなりませう。實際、あの元氣な子ども達といつしよに元氣にして居なければならんことは、教壇におさまるかへつて居る先生方に較べて、どんなにか暑いことです。上氣した頬、汗の流れる額、保姆の方々の御苦勞は容易なものではありません。

○殊に、今年の東京の多くのパラツク幼稚園や保育所の暑さは、どんなでせう。入梅中の此間の二三日のお天氣にも、目のまひさうな暑さがあつたのでした。ほんとうの夏になつたら、どんなきついこととせう。普通の建築の幼稚園に居る方々は、義理にも暑さとはいへませんね。

○成人はどうでも我まんするとして、可愛さうなのは幼児達です。トタン屋根に焼きつく日光、日蔭のない窓、庭、強い日光にこげた土から、むれる様な風が吹いて來るのです。しかも、砂まみき上げて來るのです。地方の方達は、今年の夏の東京の子どものことを思つてやつて下さい。(倉橋)

御注意	料告廣		表價定		冊數	定價	郵稅
	表紙	裏付	十二冊(前金)	六冊(前金)			
△(外國行郵税は一部十二錢の割にて御拂込下さい) △本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金で御送金下さい(東京四六書堂寄書院宛) △前金切れの節は帶紙に「前金切」と致します。 △郵券送金の節は一割増で一錢切手に願ひます。 △本誌の一切は教文書院宛御照會下さい。	普通面一頁	金四拾五圓	金七拾圓	金四圓貳拾錢	金貳拾五錢	金壹錢	
	表紙前付	金七拾圓	金四圓貳拾錢	金貳拾五錢	不	不	
	表紙裏付	同	同	不	不	不	
	普通面一頁	同	同	不	不	不	

大正十三年六月二十八日納本
 大正十三年七月一日發行
第二十四卷第四號

無 斷
 轉 載

編輯者 倉橋 惣三
 發行所 東京市下谷區上根岸八十八番地 越元新吉
 印刷者 東京市小石川區戸崎町七十二番地 沖田瀧次郎
 印刷所 教文書院印刷部

發行所 東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)

電話下谷三〇四七番・一九五一番
 振替東京四六一一一番

東京女子高等師範學校
保姆兼教諭

坂内みつ子先生著

子供の遊ばせ方

四六判クロス製・ポイント活字・正價金一圓八十錢・書留送料十三錢

訂正第八版出來

子供を遊ばせ
るところは

「中々難しいが又愉快なものである。」

幼児教育の理論と實際に精通した著者の、子供に對する遊ばせ方の研究書であります。發行以來半歳後の今日賣行きの持續するのは内容の良い結果と信じます。今回改版訂正の上第八版を發行致しました、學校でも家庭でも備ふべき良書であります。

目次

- 子供を遊ばせるといふ意義
- 子供を遊ばせるに大切な條件
- 子供の好む遊びの種類
- 子供の好む玩具の種類
- 玩具選定の標準
- 子供を遊ばせる方法
- 室内遊び
- 團體遊び
- お話し
- 個人的遊び
- 室外遊び

以下
數十項

發行所

東京上野公園
寛永寺坂下

教文書院

電話下谷三〇四七・一九五一番
振替東京四六一一一番

茂木由子先生作謠
萩原英一先生作曲

土川五郎先生振付

第一輯

律動遊戯

菊判クローズ製・舶來アートペーパー・寫真版六十四圖

近刊 八月上旬發賣

茂木先生の謠に萩原先生の作曲 遊戯界の第一人者である著者の振付と三先生の御盡力で今迄にない理想的の遊戯教本が出来ました。各々多數の寫真版を入れて表情の變化を理解し易く巧みに現はしてあります。

發行所

東京上野公園寛永寺坂下
(上根岸八十八)

教文書院

電話下谷三〇四七番
振替東京四六一二番

東京女子高等
師範學校教授

矢澤 弦月 著

四六判總クローズ 正價金三圓
ポイント新活字 書留送料十七錢

近 刊

美學及藝術論

畫會新人の稱ある著者が多年苦心研究の結晶美學、藝術論の眞
隨を縱横に批判せる一大論文である、殊に日本美術史論、西洋
美術史論は著者によつて初めて味ひ得らる。

發行所

東京上野公園
寛永寺坂下

教文書院

電話 下谷 三〇五四
一五七一番
振替東京四六一番

東京音楽學校教授

萩茂 原木由一 先生作曲

第一輯



菊倍判製本・裝幀頗る美本・正價
・送料

近刊 八月上旬發賣

無邪氣な 無邪氣な 眞に子供の氣分になつた
可愛い、可愛い、 天國に遊ぶ様な氣分になつて
歌へる 弾ける 教へられる新曲です

- 第一、カケククラ
- 第二、大きなお日様
- 第三、ピ ア ノ
- 第四、タ コ
- 第五、コケツコ

ピ ア ノ

伴奏付

發行所
 東京上野公園永坂寺下
 文教書院
 電話下谷三〇九四番
 東京東區一六一番

童謠及新舞踊講習會

一、講師と科目

1. 童謠と教育及作謠法.....野口雨情
2. 學校劇について.....葛原 蘊
3. 童謠作曲の理論及實際.....黒澤隆朝
4. 童謠新舞踊の理論及實際.....日本體育會體操學校師 久保富次郎
大阪金蘭會女學校講師 向井忠一
童謠新舞踊研究會主幹
5. 伴 奏.....

一、期日及會場

1. 東京は八月二日より六日迄(午前八時より十二時迄)東京市赤坂區青山小學校(市電青山三丁目下車)
2. 大阪は十三日より十七日迄

講師は黒澤氏、久保富次郎氏、向井氏と野口氏若くは葛原氏、南區渥美小學校(市電長堀橋下車)

一、會費と申込

會費金三圓、申込と同時に御納入のこと。受講場所御明記のこと。七月十五日限り本會宛御申越のこと。

大阪市外鷺洲町北蒲江六二八(八坂神社前)

主 催

童謠新舞踊研究會

(振替口座、大阪七壹壹四六番)

後 援

大阪毎日新聞社

行刊の庫文出の日字マーロ

川副佳一郎氏編著、早川桂太郎氏畫及裝幀

日の出文庫

鈍太郎の山

菊半截新型
挿畫十數葉
二度刷美本

定價二十五錢
送料金四錢

七月中旬發行

日本の各家庭では、今しきりとローマ字書きの健全な、そして教育的價值ある讀み本を熱望して居ます。「ローマ字日の出文庫」は、此の切なる家庭の要求に應じて生れたものであります。其の第一篇「鈍太郎の山」は、題材を名高い室鳩巢の駿臺雜誌に取り、支那日本に互る極めて興味ある、暗示に富んだ物語を著者特得の分解り易い、上品な、そして美しい現代語で綴つたものであります。少年少女諸君及び子供を持つた親御達へ、是非一讀をお勧め致します。

第二篇 榎の木の僧正

日本文學の中に異彩を放つて居る「徒然草」の中から、特に面白いお話數篇を選んで、ローマ字で話したものを

近刊

第三篇 さぐさの自慢

腹を抱えて笑ひながら、然も其の間深い暗示と、教訓とを味ことの出来る不思議に面白い本です。

近刊

此の外、次ぎ次ぎに面白い有益な本を出します。

ローマ字日の出文庫の特色

読んで面白く、見て美しい □ 小供の本であると同時に大人の必ず一讀すべき本である □ 家庭文庫の一部になる □

第二十四卷第四號(每月一回一日發行)

大正十三年六月廿八日印刷
大正十三年七月一日發行

定價金三十五錢

院書文教